

池田治政200年遠諱記念シンポジウム

「数寄大名」の魅力に迫る

幕府の質後約令に反するな(蘭館敷断新性格が知られる一方、後楽園の芝生や閑谷学校の再興に尽力し、文化にも造詣の深かった第五代岡山藩主の池田治政(1750-1818年)。その200年遠諱を記念したシンポジウム(同

「月」の書

遊び心感じる

谷一 それぞれの視点から治政の魅力を語ってほしい。

熊倉 特別展で何より驚かされるのが治政の巨大な書だ。「月」の手は、一辺が20センチもあるかという落款を押印するためだ。へまこがあり、遊び心のある大書だ」と感じる。

熊倉 特別展で何より驚かされるのが治政の巨大な書だ。「月」の手は、一辺が20センチもあるかという落款を押印するためだ。へまこがあり、遊び心のある大書だ」と感じる。

熊倉 特別展で何より驚かされるのが治政の巨大な書だ。「月」の手は、一辺が20センチもあるかという落款を押印するためだ。へまこがあり、遊び心のある大書だ」と感じる。

熊倉 特別展で何より驚かされるのが治政の巨大な書だ。「月」の手は、一辺が20センチもあるかという落款を押印するためだ。へまこがあり、遊び心のある大書だ」と感じる。

熊倉 特別展で何より驚かされるのが治政の巨大な書だ。「月」の手は、一辺が20センチもあるかという落款を押印するためだ。へまこがあり、遊び心のある大書だ」と感じる。

熊倉 特別展で何より驚かされるのが治政の巨大な書だ。「月」の手は、一辺が20センチもあるかという落款を押印するためだ。へまこがあり、遊び心のある大書だ」と感じる。

遠諱記念事業委員会主催、山陽新聞社共催)が昨年12月17日、岡山市北区柳町の岡山さん太ホールで開かれた。茶道を愛好した「数寄大名」としての側面にスポットを当て、研究者らが繰り広げた討論や講演を振り返る。(補増心也)

遊び心感じる「月」の書

MIHO MUSEUM 熊倉功夫館長



後楽園で相撲や茶会も

元川崎医療福祉大教授 神原邦男氏



反骨精神の裏に茶の心

池田家菩提寺・曹源寺 原田正道住職



林原美術館(岡山市北区丸の内)の特別展「池田家の至宝と曹源寺」は28日まで(月曜休館)。池田治政の書画や愛用品、同寺の寺宝など73件を展覧している。



池田治政の豪快な書。「月」(手前)は伊丹印のスペースを考えた字体がユニークだ



曹源寺には「池田治政坐像」が伝わる。威厳の漂う風貌だ



池田治政自作の「竹一層切花入(銘・松風)」の通常の倍ほどの大ぶりなサイズが目を引き

「治政流」家臣も熱心に

神原氏基調講演「備前池田家と茶の湯」



岡山藩主池田家や家臣の茶の湯の取り組みを紹介する神原氏

デイスカッションに先立って神原氏が「備前池田家と茶の湯」と題して基調講演し、茶を巡る池田家臣の動向を解説した。

治政は1779年、参勤交代で備前予定だったが、病気を理由に翌年まで江戸にとどまった。この約2年間、池田家の江戸屋敷に茶人の川上末白、姫路藩主の酒井宗雅らが出入りし、茶会を催した記録が残っている。病氣は口実と思うが、目立った動きはできない。内々で茶の湯を楽しみ、自らも習い始めたのだろう。

岡山に治政が戻ると、裏千家の運水宗達も招かれ、後楽園で盛んに茶事が行われるようになる。上級藩士は茶の湯を権威するよう命じられた。家老クラスになると御茶道と呼ばれる家臣を召し抱え、京都へ作法を学ばせに行かせたりした。

後楽園の竹で作った花入れや備前焼の茶器を使った「治政流」の茶がこの時期に花開いた。当時の茶道熱を表す史料として、家老の屋敷図がある。旭川東岸にあった伊木家の下屋敷(郊外の別邸)は広大な庭に多様な植栽と池を配し、二つの御茶室を備えていた。

伊木家からは幕末に茶人としても名高い伊木三狼系が出て、岡山茶の湯の礎を築いた。屋敷地の痕跡を探することは難しいが元の敷地がどうだったか知ってほしい。

池田治政200年遠諱記念シンポジウム 山陽新聞社共催